学びに新しい「挑戦」と「観点」を。 vol.5 2007年6月号

CHUOH 知っ得通信 TRY+ANGLE

2007年6月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2－15－5 http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/

Mail Seminar

感情の論理 vol.4 「人の感情を動かす」

感情の動きと行動は「鶏と卵」の関係です。車の両輪のように、どちらが欠けても「客」を動かすことはできません。今回は、人の感情を動かす方法について解説します。この命題は「人は何に感動するか」を考察することで解けてきます。

人は、技術に「感心」はしても「感動」はしません。

例えば、最近の映画はコンピュータの技術革新によって、様々なシチュエーションを、映像化できるようになりました。主人公を昭和の街並みで、違和感なく動かすことが可能です。あの大ヒット映画「３丁目の夕日」も、そうした技術を駆使して作られています。しかし、あの映画で得られた感動は、けっして技術によって、もたらされたわけではありません。そこで展開される人の営みが、感動を作り上げています。つまり、感動はデジタルによって作られるのではなく、アナログによって作られているのです。

なぜなら、「人」そのものが、究極のアナログ的存在だからです。例えば、陸上界のスーパースターと言えば、我々の世代はすぐに、カールルイスを思い出します。確かに、100 メートルを９秒９で走り抜ける「速さ」には感心しますが、我々がその姿に感動するのは、その姿の向こうに、100分の１秒を縮めるための苛烈な努力、我々では真似のできない不断の鍛錬が、透けて見えるからです。

大ヒットしたハリウッド映画でも、よくよく単純化すると、それは、１人の主人公の成長談になっていることに気付きます。「マトリックス」も「ロード・オブ・ザ・リング」も「プリティ・ウーマン」も…。

そう、人は何かを目指して成長しようとする「誰かの姿」に感動するのです。

塾が市場に感動を与え、市場を動かす方法も明らかです。塾が(あなたが)成長する姿を見せることです。

私はセミナー等で「変化」の大切さを強調します。それは即(すなわ)ち、成長の大切さと同意語です。ただし、勘違いしていただきたくないのは、技術は必要ないということではないということです。技術は重要です。ただ、必要条件であって充分条件ではないということです。「技術の向上を目指して不断の成長を遂げること」が大切なのです。

そして、その姿を見せることが、マーケティングであるとするならば、マーケティングとは小手先の技術ではなく、しっかりとした幹に裏打ちされた枝葉ということが分かります。以前紹介した「シャワーキャップの利用」にしても、その表面的な行為だけを真似ても同じ感動を作ることは難しいでしょう。

さて、そうした前提で、「人の感情を動かす(感動させる)方法」の具体例を提示します。どこの塾でも、塾生の誕生日を祝っていることと思います。ワン・ツー・ワン・マーケティングにおいて、誕生日は文字通り「あなただけの」記念日です。これを利用しない手はありません。どうぞ、その日に届くようにバースデーカードを送ってあげてください。100 円で出来る感動作りです。

その時、メッセージに次のような工夫をします。「誕生日おめでとう」に続けて、「今日は、あなたを産んでくれたご両親に感謝する日です」と書くのです。(手書きがいいです。字が下手でも構いません。あなたはペン習字のプロではないのですから。)

塾から送られてきた郵送物は、必ず保護者も目を通します。せっかくなのでご両親も感動させようという手法です。きっと、多くのご家庭から感謝の電話、手紙が届くはずです。ファン作りの手法としては最も費用対効果の高い方法だと思いますよ。

相手の感情に立って考える。

「感情の論理」とは大層なことではなく、ごく当たり前の考え方です。売り手市場のときは「売り手の感情」のままでも商品は売れたのですが、買い手市場では主導権が消費者に移っています。だからこそバースデーカードを開くときの相手の感情を思いやって行動することが重要なのです。そう、そこに求められるのは健全な想像力です。

全国学習塾援護会 森 智勝

今月の気になるハナシ

公立中高一貫校

1．公立中高一貫校設立の意味

公立の中高一貫校の設立の目的は、単純に「選択肢を増やして、教育の多様化を図る」こと。その目標の具現化として、文部科学省の「２１世紀教育新生プラン」に基づいて、『当面、高等学校の通学範囲に少なくとも１校整備すること』を目標に、全国で、５００程度の中高一貫校の設立を目指しています。

誰もが、実質的に中高一貫教育を選択できる環境づくりのために、５００校（公立・私立問わず）が当面必要な数としています。そのため、全国各地で、急速に公立中高一貫校が設立されています。平成の大合併などで、市町村の数が変動しているため、正確な“市”の数は把握できていませんが、１～２市に１校ぐらいの割合になるのではないでしょうか。ということは、先生がお住まいの地域にも、『中高一貫校』がすでにあるか、できるということになります。

2．公立中学・高校のこれから

公立中高一貫校は、６年間を通じた教育指導を行うメリットだけでなく、一方で、長期間を同じメンバーで過ごすことにより、「環境になじめない生徒が生じる恐れがある」などのデメリットもあります。また、「従来の中学・高校での学校生活を送りたい」と考える児童も当然いるでしょうから、国としても、すべての学校を画一的に中高一貫教育校にするつもりはないようです。

つまり今後は、従来の中学・高校の制度を選択するか、中高一貫教育を選択するかは、児童と保護者が、自分達でメリット・デメリットを検討して、答えを出していくことが、強く求められます。ただ、検討しようにも検討材料がないというのが、現状のようです。

私立の中高一貫校とは、設置趣旨、目標、授業形態や、かかる費用も違います。（公立は、前期３年は中学相当のため授業料は、無料）

公立中高一貫校は、まだまだ不透明な部分があります。学校の方向性などがあっていると思えた時にのみ、進路として選択するようになるかもしれません。

3．それでも、中高一貫教育は人気？

公立の中高一貫校の説明会は、人があふれんばかりに集まるそうです。なぜか？それは、私立の中高一貫校が作り上げてきた、「中高一貫教育」のイメージと、「公立」という響きからでしょう。

「中高一貫教育」は、俗に『２・３・１制』とも言われています。中学の勉強は２年間で、高校の勉強は３年間、残った１年間は、受験対策に費やすというものです。この方法で私立校は、実際に難関大学への合格実績を出しており、中高一貫校に行かなければ、難関大学進学は難しいとさえ、思い込んでいる保護者も多いようです。

しかし費用的に、２極化の進む現代社会では、二の足を踏む家庭も多いのです。そこに『公立』という冠を持った「中高一貫校」の登場。しかも、各地に次々と設立されています。

そこで、小学生の児童を持つ保護者は、「難関大学への道のりが見える“中高一貫教育”が、私立より確実に安い“公立”で受けられる」とイメージし、説明会に、人があふれるようになっているのです。事実、公立一貫校受験者は、入試結果とその後の進学校から推察すると、多くが従来の公立中学進学組になるようです。

4．学力試験ではない適正検査

実際に公立中高一貫校のテストをご覧になったことはありますか？問題を見ると、結構難しく感じるのではないでしょうか。実際、大手塾では、対策講座などを行うところもあり、受験対策に余念がありません。しかし、文部科学省は、「公立の中等教育学校及び併設型中学校では、入学者の決定に当たって、学力検査を行わないこととしている」と述べています。

では、なぜ大手塾は対策を練るのでしょうか？選抜時に行われている『適性検査』は、何なのでしょうか？公立の中高一貫校導入の際、「学力検査を課さずに子どもの学力を把握できるのか」「レベル差がありすぎると、６年間の一貫体制に支障がでないか」など、さまざまな問題が議論されたようです。そこで公立中高一貫校は、学力検査ではない、新しいテスト、『総合適性検査』を編み出したのです。日本特有の曖昧さが生み出したテストが、今後どうなっていくのかは、無視できない問題ではあります。

今後、保護者側の希望通り、「公立中高一貫校」が、安価な費用で、充実した教育を行っていくならば、「できれば公立の中高一貫校へ行かせたい」という欲求は、ますます高まると予想されます。今のうちに準備を始め、公立中高一貫校受験にも対応できるようにしておくのか。私立中学や高校受験に特化させていくのか。慎重かつ大胆な決断が迫られる日が、やってきています。